

ワーグナー：《ヴェーゼンドンク歌曲集》

ワーグナーはスイスでの亡命時代、実業家でパトロンでもあったオットー・ヴェーゼンドンクの妻マティルデと衆目をはばかりの関係を持った。それはやがて楽劇《トリスタンとイゾルデ》に昇華されるわけだが、そのマティルデの詩に作曲したのが《ヴェーゼンドンク歌曲集》。5つの歌には、叶わぬ思いをひたすら夢想する濃密な詩情があふれている。なお、本作は《トリスタンとイゾルデ》と同時期に作曲されたため、共通の楽想が聴取される。

シベリウスの歌曲

終の棲家となったヤルヴェンパーに移住する 1904 年までに書かれた初期の歌曲群はいくつかの曲集にまとめられている。作品 17（全 7 曲）のうち、最後の 2 曲はシベリウスにはめずらしいフィンランド語のテクスト。1898 年に作曲された第 6 曲「タベに」は、フィンランドの詩人フォルスマンによる。詩人の妻が「Ilta」（イルタ）という名であり、この曲名には「タベに」と「イルタに」という二重の意味が掛けられている。1903～04 年に書かれた作品 38（全 5 曲）は、初期の集大成をなす歌曲集。なかでも第 2 曲「海辺のバルコニーで」は、曲集中の珠玉と言える。19 世紀スウェーデンの文豪リュードベリの詩により、海の彼方に彼岸を視るような、永遠の沈黙への憧憬が感じられる。作品 37（全 5 曲）も名作が多く、いずれもスウェーデン語の詩に作曲されている。第 3 曲「日の出」は、スウェーデンの作家トール・ヘドベリによる。燃えるような夜明けのひと時、いにしへの伝説を幻視する。シベリウスの歌曲集の中でも傑作と名高い作品 36（全 6 曲）は 1899～1900 年の作。曲集の最後を飾る「3 月の雪の上のダイヤモンド」は、シベリウス歌曲を代表する名歌。フィンランドの詩人ヴェクセルによるスウェーデン語詩で、雪上に輝く、死に隣接したような光の美しさを歌う。同じ曲集の第 4 曲「そよげ草」は、スウェーデンの詩人フレーディングの美しいスウェーデン語詩による。若い命を湖に沈めた娘インガリルの哀しみを代弁するように草が風にそよぐ。作品 37 の第 5 曲「逢引きからもどった娘」は、フィンランドの大詩人ルーネベリによる。恋人との逢引きから帰ってくるたびに変わる娘の様子を歌うが、最後は悲劇的な結末となる。作品 36 の第 1 曲「黒いばら」は、スウェーデンの詩人・画家ヨセフソンのスウェーデン語詩。「悲しみのばらは夜のように黒い」と歌う。

ドヴォルザーク：《ジプシーの歌》

アドルフ・ヘイドックのチェコ語の詩を用いて、ドヴォルザークが 1880 年、39 歳の時に作曲したのが、全 7 曲からなる《ジプシーの歌》。独自の音楽文化を培っていた、放浪の民ジプシー（ロマ）は、ドヴォルザークをはじめ、リスト、ブラームス、バルトークなど多くの作曲家に影響を与えた。本作の第 4 曲「母の教え給うた歌」は、ドヴォルザークの歌曲のなかでも特に人気が高く、演奏機会も多い。

R.シュトラウスの歌曲

悲しみへの賛歌

深い抑揚から生まれる言葉と旋律が魅力的な佳品。詩の主旨は、冒頭の「おお、悲しみへの讃歌を恥じてはならぬ！」に凝縮されている。なぜなら「永遠に別れる時の口づけほど熱いものはない」から。

作品 10 より「夜」「ダリア」「万霊節」

作品 10 は、R.シュトラウス初期の傑作歌曲集。詩はヘルマン・フォン・ギルムの『最後の手紙』からとられている。「夜」は、神秘的な夜の静寂を讃えつつ、「夜をぼくは恐れる、夜がぼくから君も奪いはしないか」と呟く。「ダリア」では「遅れてきた愛」を、春が過ぎたあと咲くダリアの花になぞらえて慈しむ。「万霊節」は、R.シュトラウスの歌曲を代表する名品。万霊節とは、カトリック教会で 11 月 2 日に定められた「死者の日」のこと。本曲も、恋人を失った男が墓参の折に抱いた心情を歌っているとされる。

誰がしたの

もともと「万霊節」などと同じ作品 10 に含まれていたが、歌曲集を組むときに外された。ゆったりと歌に入って、徐々に感情の振幅を増していく。タイトルになっている「誰がしたの」は、「自然の摂理」あるいは「ミューズの働き」を指している。

二人の秘密をなぜ隠すのか

もはや隠し立てできなくなった恋心を、泡立つようなピアノに乗せてハイトーンで歌い上げる。簡潔なうえに演奏効果が高いため、アンコール・ピースとして取り上げられることも多い。